Memoirs of
Osaka Institute of Technology
Vol. 67, No. 2（2022） pp. 93～102

『花鳥余情』における「彦星の光」注をめぐって*

横山　恵理

情報科学部　情報システム学科

(2022年12月1日受理)

Concerning the Description of 'Hikoboshi no Hikari' in Kachoyosei

by
Eri YOKOYAMA
Department of Information Systems, Faculty of Information Science and Technology

Abstract

"Kachoyosei" (a commentary on "Genji Monogatari" written by Kanera ICHIJO, written in the Muromachi period) mentions old Waka from "Manyoshu" and "Ise Monogatari" regarding "the light of Hikoboshi" that can be seen in the Uji Jyujo in "Genji Monogatari" (Agemaki volume), and the interpretation of the man who was likened to Hikoboshi's light (Azumaya volume) are annotated. These commentaries were adopted after "Kachoyosei" and are unique among commentaries on "Genji Monogatari." This paper examines how Kachoyosei captures Uji Jyujo (especially the story of Ukifune), using the content of the commentary on Hikoboshi no Hikari as a clue.

キーワード；花鳥余情，一条兼良，源氏物語，天文文化学，彦星，天の川

Keyword； Kachoyosei，Kanera ICHIJO，Genji Monogatari，Cultural Studies of Astronomy，Altair，Milky way

---

＊　第 23 回天文文化研究会で発表したものに加筆（2022 年 6 月 19 日，大阪工業大学梅田キャンパス）

『花鳥余情』における「彦星の光」注をめぐって

情報科学部　情報システム学科　横山　恵理

（二〇二二年十二月一日受理）

一、はじめに

『花鳥余情』は、一条兼良（一四〇二～一四八一）によって、文明四年（一四七二）[注1]に成立した『源氏物語』注釈書である。その注釈方法の特徴については、伊井春樹氏[注2]、稲賀敬二氏[注3]、武井和人氏[注4]らによって明らかにされてきた。近年では、松本大氏[注5]によって『河海抄』利用の実相が報告されている。これらの先行研究で述べられているとおり、『花鳥余情』はその序文[注6]に、四辻善成（一三二六～一四〇二）による『河海抄』の書名を挙げ、『河海抄』の「のこれるをひろひあやまりをあらたむる」注釈姿勢、すなわち、『河海抄』の不備を補い、誤った記述を修正するような注釈姿勢をとることを明記している。ただ、『花鳥余情』の注釈方法は、『河海抄』が、徹底した出典考証を行い、詳細な故事や和歌を指摘するほか、『源氏物語』本文の背景となる歴史事実によって作品を読み解く準拠論を主張する方法とは異なっている。『花鳥余情』は、詳細な出典考証よりも、本文の文意や文脈を明らかにしようとする態度を示しており、一条兼良が独自に確立した源氏学の解釈が反映されている。なお、『花鳥余情』には文体論に関する考察も見られ、それらは、連歌師・宗祇（一四二一～一五〇二）、肖柏（一四四三～一五二七）から、三条西実隆（一四五五～一五三七）『細流抄』へと続く三条西家の源氏学へと継承されていく。

さて、『花鳥余情』にみられる一条兼良の源氏学は、それ以前に成立した『源氏物語』注釈書（ただし、現存し、本文内容を確認できるもの）が踏襲してきた注釈内容とは異なる解釈を提示している部分や、『花鳥余情』以前に成立した注釈書が立項していない本文を取り上げ、注を施している内容から窺い知ることができる。

例えば、『花鳥余情』は、『源氏物語』宇治十帖にみえる「彦星の光」という表現について、『万葉集』・『伊勢物語』の古歌を挙げる（総角巻）、彦星の光に喩えられた男性についての解釈を示す（東屋巻）などして、注釈を施しているが、これらの注釈は『花鳥余情』以前に取り上げられた例はきわめて少ない。また、『花鳥余情』の注釈内容が『花鳥余情』以後に引き継がれることはなく、『源氏物語』注釈書の中でも特異なものとなっている。そこで、本稿では、「彦星の光」への注釈内容をてがかりとして、『花鳥余情』が宇治十帖、特に、「彦星」、「彦星の光」という表現を用いて語られる「浮舟をめぐる物語」をいかにとらえたかについて考察する。

二、『源氏物語』総角巻への注釈

まず、『源氏物語』総角巻の注釈を取り上げる。『源氏物語』本文のうち、該当箇所を引用する（傍線部は私に付す。以下同じ）[注7]。

『源氏物語』総角巻［新編全集⑤・二九三頁］

①十月一日ごろ、網代もをかしきほどならむとそそのかしきこえたまひて、紅葉御覧ずべく申しさだめたまふ。親しき宮人ども、殿上人の睦ましく思すかぎり、いと忍びてと思せど、ところせき御勢ひなれば、おのづから事ひろごりて、左の大殿の宰相中将参りたまふ。さてはこの中納言ばかりぞ、上達部は仕うまつりたまふ。ただ人は多かり。

（略）

②舟にて上り下り、おもしろく遊びたまふも聞こゆ。ほのぼのありさ

ま見ゆるを、そなたに立ち出でて、若き人々見たてまつる。正身の御ありさまはそれと見わかねども、紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。③世人のなびきかしづきたてまつるさま、かく忍びたまへる道にも、いとことにいつくしきを見たまふにも、げに④七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめとおぼえたり。

［校異］「たなばたばかりにても」―「としに一夜の契にても（陽明家本：別本系統）」―「としに一夜のちきりなりとも（保坂本：別本系統）」―「ひとよのちきりにても（平瀬本：河内本系統）」、「かかる」―「かゝらん（別）」、「こそ」―「こそは（横山本：青表紙本系統、平瀬本：別本系統）」、「まちいてめ」―「まちみめ」（陽明家本：別本系統）―「まちいてゝみめ（保坂本：別本系統）」―「まちいてゝもみめ（平瀬本：別本系統）」

十月一日頃、匂宮は紅葉狩りを口実にして宇治訪問を計画した（傍線部①）。傍線部②「舟にて上り下り」以下は、対岸に来た匂宮一行を望む宇治の大君や女房たちの視点から語られる。宇治の姫君たちからは、「世間の人々がなびき従って大切にお仕え申している有様が、こうしたお忍びの行楽の際でも、本当に格別に豪勢である」（傍線部③）ように目に映り、傍線部④「七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめとおぼえたり」、すなわち、「七夕のように年に一度の逢瀬であっても、このような彦星の光をこそお待ちしていたいもの」と感じられたという。

ここで「彦星の光」に喩えられているのは匂宮である。この時点で、大君は、妹の中君を匂宮に縁づけたいという希望を抱いていたが、宇治におかれた自分たち姉妹の境遇と、対岸にいる豪勢な匂宮一行の様子とを比較して逡巡している様子も窺える。また、匂宮一行は、大君らが見える対岸まで来ておきながら、都からの迎えが来たこともあり、宇治の姫君らが暮らす八の宮邸を訪問せずに帰京してしまう。匂宮は、立場上、都と宇治を容易に行き来することができない、ということを踏まえて、「彦星の光」に喩えたものであろう。なお、対岸の匂宮が「彦星」であるとすると、匂宮と宇治の姫君たちを隔てる宇治川は「天の川」と捉えられていることになる。

『花鳥余情』は、当該箇所（傍線部④）について、以下の注釈を加える。

一条兼良『花鳥余情』（注8）

けにとしに一よの契なりともかゝるひこ星の光をこそ

万

としにありて一夜いもにあふひこ星と我にまさりて思らんやそ

伊勢物語　ひこほしに恋はまさりぬ天川へたつるせきをいまはやめてよ

『花鳥余情』は、当該本文に対し、『万葉集』の和歌と、『伊勢物語』の和歌をそれぞれ引歌として挙げる。当該本文が、これらの和歌の内容を踏まえて解釈できるということを示唆するものである。なお、『花鳥余情』以前に成立した『源氏物語』注釈書（注9）では、当該本文は注を加えられておらず、現存する注釈書の中で当該本文に注釈を行ったのは『花鳥余情』が初めてである。

それでは、『花鳥余情』は、これら引歌二首を挙げることによって、どのように当該本文を読み解こうとしたのであろうか。引歌それぞれの出典を確認する。まずは、『万葉集』を引用する。

『万葉集』巻第十五・三六五六～三六五八番歌（注10）

七夕に天漢を仰ぎ観て、各所思を述べて作る歌三首

秋萩に　にほへる我が裳　濡れぬとも　君がみ舟の　綱し取りてば

右の一首、大使

年にありて　一夜妹に逢ふ　彦星も　我にまさりて　思ふらめやも

夕月夜　影立ち寄り合ひ　天の川　漕ぐ舟人を　見るがともしさ

『花鳥余情』が引歌として挙げる、傍線部・三六五七番歌の歌意は「一年に一夜だけ妻に逢う彦星もわたしほどに物思いすることがあろうか」というものである。一年間離れ離れでいて、七夕の夜にようやく逢瀬がかなう彦星の気持ちを、総角巻本文に重ね合わせる読みが提示されている。ここで、「げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ」と思っているのは宇治の大君と女房たちである。引歌として挙げられた『万葉集』

歌や、『万葉集』所収七夕歌のもととなった中国の七夕伝説は、織女が牽牛のもとを訪れる（父系家族制）ことを前提としている。一方、日本では牽牛が織女のもとに通う（妻問婚）という形をとっており、大陸文化の国風化がみられる。『源氏物語』総角巻でも、男性が女性のもとに通う日本の風習をふまえて、織女にあたる宇治の姫君たちが、牽牛にあたる匂宮の訪れを待ちわびる心情が語られている。

次に、『花鳥余情』が引歌として挙げる『伊勢物語』本文を示す。

『伊勢物語』第九十五段「彦星」（注11）

むかし、二条の后に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはして、よばひわたりけり。「いかでものごしに対面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむ」といひければ、女、いと忍びて、ものごしにあひにけり。物語などして、男、

ひこ星に　恋はまさりぬ　天の河　へだつる関を　いまはやめてよ

この歌にめでてあひにけり。

二条の后が、自身に仕えていた男からの求愛に対して、たいそうこっそりと物隔てに逢った際、男が和歌を詠んだ。「私は彦星よりももっと激しい恋心を抱きました。天の河で隔てている恋路の関、それになぞらえられる隔ての物など、いまはやめてしまってください。この和歌に心惹かれて、女は親しく逢うようになった、という歌徳が語られている。

『伊勢物語』では「男」が詠んだ和歌に込めた心情を、総角巻では宇治の姫君たちの心情に重ね合わせている。引歌をふまえて総角巻本文を読むとき、「天の河へだつる関」にあたるのは「宇治川」であり、この宇治川を越えて、私たちに逢いに来てほしいという、宇治の姫君たちの強い願いが込められていよう。また、引歌だけではなく『伊勢物語』彦星段の内容もふまえるのであれば、「ひこ星に」歌が相手の心を動かして、男女が親しく逢うようになったことから、宇治の姫君たちが、なかでも宇治大君が、妹・中君と匂宮との縁談がうまく運ぶように祈る気持ちにも重ねられていよう。

『花鳥余情』が、『万葉集』歌と『伊勢物語』彦星段を引歌として挙げることによって、総角巻の当該本文は、「彦星の光」に喩えられた匂宮に対し、天の川のような隔てとなっている宇治川や身分差といった障害を越えて逢いに来てほしいという、宇治の姫君たちの切実な願いを重ね合わせて解釈されることになる。

なお、『花鳥余情』以降に成立した注釈書のうち、当該本文を取り上げる作品は、三条西実隆『細流抄』、九条稙通『孟津抄』、中院通勝『岷江入楚』、北村季吟『湖月抄』である。以下にそれぞれ引用する。

三条西実隆『細流抄』（一五一〇～一五一三年成立）（注12）

たなはたはかりにて　としの一夜のちぎり也ともと也紅葉ふきたるふねとかきてかくいへる紅葉をふねの心尤優也

九条稙通『孟津抄』（一五七五年成立）（注13）

かやうにまれ〳〵にわたり玉ふにつきて七夕と書たりかゝる御躰見たてまつれはまれにてもと思ふなりひこほしのひかりに匂をさして面白き書やう也

中院通勝『岷江入楚』（一五九八年成立）（注14）

けにたなはたはかりにてもかゝるひこほしのひかりを・（こ）そ

花　詞云けにとしに一夜のちきりなりとも　かゝるひこほしのひかりをこそとあり

万　としにありて一夜いもにあふ彦星もわれにまさりて思ふらんやそ

伊勢物かたり

ひこほしは恋はまさりぬ　銀（天）川へたつるせきを今はやめてよ

秘　年の一夜の契りなりともと也。紅葉をふきたる舟とかきてかくいへる。紅葉を舟の心尤面白し。

北村季吟『湖月抄』（一六七六年成立）（注15）

（細流抄）「年の一夜の契なりともと也。紅葉をふきたると書きてかく云へる、紅葉を舟の心、尤面白し」（孟津抄）「かかる御躰を見奉れば、まれにてもと思ふ也」

『花鳥余情』以後に成立した注釈書のうち、『花鳥余情』の名を明記して

引用するのは、中院通勝『岷江入楚』のみである。『岷江入楚』は、それまでに成立した注釈書（『河海抄』、『花鳥余情』、『弄花抄』、三条西家の秘抄、三条西実枝『山下水』）等から主要な注釈を集め、中院通勝自身の注釈も加えたうえで集大成としてまとめたものであるが、批判を加えることなく引用していることから、『花鳥余情』の解釈に賛同する立場であると推測される。一方、『細流抄』は『花鳥余情』の注釈には一切触れていない。また、『湖月抄』も同様に、『花鳥余情』および『花鳥余情』を引用した『岷江入楚』は引用せず、『細流抄』と『孟津抄』のみを引用する。そもそも『湖月抄』の注釈態度は、『細流抄』と『孟津抄』を尊重しているということが指摘されている（注16）が、『湖月抄』が当該本文に『花鳥余情』の一部でも引用しなかったということは、過去の注釈を要約整理して掲載する中で『花鳥余情』の注釈内容は重要視されなかったことを意味しよう。総角巻当該本文に対する注釈史の中で、『花鳥余情』の注釈内容だけが特異なものとして浮かび上がってくる。

三、『源氏物語』東屋巻への注釈（一）

『源氏物語』東屋巻には、「七夕」、「天の川」、「彦星」という表現が用いられている。まずは、「七夕」という語が用いられている本文を確認する。

『源氏物語』東屋巻［新編全集⑥・四二～四三頁］

宮渡りたまふ。ゆかしくて物のはさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、（略）この御ありさま容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。

［校異］「七夕ばかり」―「たなはたのちきり（御物本：別本系統、保坂本：別本系統、池田本：別本系統）」、「かやうに」―「かやうにて（宮家本：別本系統、陽明文庫本：別本系統、宮内庁図書寮本：別本系統、池田本：別本系統、國冬本：別本系統」、「通はむは」―「かよはん（宮家本：別本系統、國冬本：別本系統」―「かよはゝ（池田本：別本系統）」、「いと」―「ナシ（別本：別本系統）」

ここには、浮舟の母君が、「宮」こと匂宮の姿を初めて見たときの様子が描かれている。「大変気品高い美しさで、まるで桜の花を手折ったような風情でいらっしゃる」と、匂宮の美しさが、浮舟の母君の視点から描写された後、「年に一度の七夕くらいの逢瀬であっても、こうしてお目にかかれるのであれば、本当に素晴らしいことだろう」（傍線部）と、母君の心情が語られている。匂宮との逢瀬が「七夕ばかりにても」という表現を用いて語られることから、東屋巻でも、匂宮を彦星に喩える総角巻の表現が意識されているといえる。

『源氏物語』注釈書における、当該本文への注釈内容を確認する。『花鳥余情』は、当該本文の一部を立項して注を加えることはしていない。ただ、第四節で述べるが、他の本文に対する注釈の中で、当該本文についても言及している。

『花鳥余情』以前に成立した注釈書では、『河海抄』（桃園文庫本・真如蔵本）が、以下のような注を加えている。

四辻善成『河海抄』（桃園文庫本）（注17）

たなはたはかりにても
古
ちきりけん心そつらき七夕の

四辻善成『河海抄』（真如蔵本）（注18）

たなはたはかりにても
古
ちきりけん心そつらき七夕のとしに一たひあふはあふかは

『河海抄』が引歌として挙げる和歌は、『古今和歌集』所収「ちぎりけむ心ぞつらきたなばたの年にひと度あふはあふかは」（『古今和歌集』巻四・秋歌上・一七八・「同じ御時きさいの宮の歌合の歌」・藤原興風）（注19）である。歌意は「一年に一度だけ逢いましょうと約束したという織女の心は本当につれないよ。一年に一度だけ逢うなどというのは、逢ううちに入るだ

ろうか」というもので、一年に一度の逢瀬しかできない境遇を嘆く男の心情が詠み込まれている。『河海抄』は、東屋巻の浮舟の母君の心情としてこの和歌を挙げているが、『花鳥余情』が当該和歌を挙げなかったのは、『古今和歌集』所収歌が男性の心情を詠むものであったため、東屋巻における母君の心情にそぐわないと判断した可能性がある。

『花鳥余情』以後に成立した注釈書に目を向けると、『孟津抄』が独自の注を、『岷江入楚』と『湖月抄』が『河海抄』の注釈を引用する形で、それぞれ注を付けている。以下に『孟津抄』と『岷江入楚』を引用する。

九条稙通『孟津抄』

かやうにまれ〳〵にわたり玉ふにつきて七夕と書たりかゝる御躰見たてまつれはまれにてもと思ふなりひこほしのひかりに匂をさして面白き書やう也

中院通勝『岷江入楚』

たなはたはかりにても
河　古　契りけん心そつらき七夕のとしに一たひあふはあふかは
箋　かねて思ひしはめてたき人もとたえかちならはうらめしかるへしとこそ思ひしに今思へは年に一たひはかりにてもかやうの事はなくさみなんと北方の思ふ也

『孟津抄』は、「七夕」と表現される由来と、「彦星の光」が「匂宮」のことを指すという解釈を示している。『岷江入楚』は、「箋」として三条西実枝の注も加えている。「箋」以下の内容は、「北方」つまり浮舟の母君が、一年に一度の逢瀬であっても匂宮の来訪を期待しているというもので、総角巻において大君が願っていた内容とも通じている。

四、『源氏物語』東屋巻への注釈（二）―『花鳥余情』の特徴―

続いて、東屋巻のうち、『花鳥余情』が注釈を加えている本文を確認する。

『源氏物語』東屋巻【新編全集⑥・五四頁】

この母君、「いとめでたく、思ふやうなる御さまかな」とめでて、乳母ゆくりかに思ひよりて、たびたび言ひしことを、あるまじきことに言ひしかど、この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わがむすめは、なのめならん人に見せんは惜しげなるさまを、夷めきたる人をのみ見ならひて、少将をかしきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。

［校異］「あまのかは」―「あまのかはせ」（陽明家本：別本系統、池田本：青表紙本系統）、「わたりてもかゝる」―「へたてゝもかゝらん」（御物本：河内本系統、保坂本：別本系統、池田本：青表紙本系統）、「ひこほしの」―「ひこほし」（御物本：河内本系統）

ここで「彦星の光」に喩えられるのは、匂宮ではなく薫である。浮舟の母君は、薫の容貌や立ち居振る舞いについて「本当にご立派で申し分のないご様子」であると賞賛したうえで、傍線部「天の川を渡って年に一度の訪れでも、こうした彦星の光を待ち迎えさせるようにしてやりたいものよ」という思いを抱いたことが語られている。母親として、浮舟と薫との縁談を強く望む内容である。

『花鳥余情』は当該本文に対し、以下のような注釈を施している。

一条兼良『花鳥余情』（注20）

あけまきの巻には匂宮の事を彦星にたとへていへり。こゝにはかほる大将の事をひこほしの光といへり。上の詞にはいといみじかるべきと中将の君の事を申侍り。男をばひこほしといひ女を七夕といへるなり。

「総角巻では匂宮のことを彦星に喩えていた」ということが明記されていることから、「彦星」という表現で示される男性が、匂宮から薫に移り変わったということを意識して、注が加えられていることが窺える。また、「上の詞にはいといみじかるべきと中将の君の事を申侍り」と、第三節に引用した東屋巻で「七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、

いといみじかるべきわざかな」と語られていた浮舟の母君の心情についても、『源氏物語』本文を遡って触れている。この注釈内容からは、浮舟の母君が、浮舟を、匂宮や薫といった貴人ととにかく結ばせたいという野心を抱いている人物としての側面も強調されよう。

『花鳥余情』の当該注釈のように、一つの項目内で二場面が結びつけられることによって、物語享受者が、物語の展開や人物造型を確認しながら解釈することが可能となる。第三節で引用した東屋巻の場面には「わが頼もしき人に思ひて、恨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、さま容貌も人のほどもこよなく見ゆる五位、四位ども」（東屋巻・新編全集⑥四二頁）とあり、情けない、恨めしいと思いながらも夫として頼りにしてきた常陸介と比べて、五位、四位の男性たちははるかに立派に見えると、浮舟の母君が感じていることが記されている。第四節で引用した東屋巻の場面でも、「わがむすめは、なのめならん人に見せんは惜しげなるさまを、夷めきたる人をのみ見ならひて、少将をかしこきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり」（東屋巻・新編全集⑥五四頁）と記され、浮舟の母君が、一貫して東国暮らしの男性を蔑視している表現が確認できるのである。同時に、浮舟の母君が、浮舟とともに都に来るまでに、母娘が置かれていた境遇を悔しく感じていることが浮かび上がってくる。この人物造型は、注釈書内で別々に立項されていては、享受者自身が注釈内容の関連性に気付くかどうかという力に任せられてしまい、注釈者の意図に気付かない恐れもある。しかし、『花鳥余情』の当該注釈のように、一つの立項において二場面が結びつけられることによって、いずれの享受者も注釈内容を理解することが可能となる。『源氏物語』注釈書の中でも『花鳥余情』は、物語本文の文意や文脈を明らかにしようとする特徴を有している、ということは第一節で言及したが、その特徴を当該注釈方法からも確認することができよう。

五、『源氏物語』東屋巻への注釈（二）
―『花鳥余情』以外の注釈例―

本節では、第四節に引用した東屋巻本文に対して、『花鳥余情』以外の注釈書がいかなる注を施したかを確認する。

『花鳥余情』以前に成立した注釈書では、『紫明抄』と『河海抄』が引歌を挙げる。

素寂『紫明抄』（注21）

あまのかはをへたてゝもかゝるひこほしのひかりをこそまちつけさせめ
ひこほしにこひはまさりぬあまのかはへたつるせきをいまはやめてよ　伊勢語

四辻善成『河海抄』

天川をへたてゝも
彦星に恋はまさりぬ天河　へたつる関を今はやめてよ

いずれも『伊勢物語』彦星段に詠まれた和歌を引歌として挙げる。『花鳥余情』が総角巻で引歌として挙げていた歌である。

『花鳥余情』以後に成立した注釈書では、『孟津抄』、『細流抄』、『岷江入楚』、『湖月抄』が、それぞれ注釈を加えている。

九条稙通『孟津抄』

あまの川をわたりてもかゝるひこほしのひかりをこそは待つけさせめ
私　薫の躰にめてゝまれにあひ玉ふともと北方心也上の詞に七夕はかりにてもといふ詞あはせてあまの河をへたてゝもかゝるひこほしの光をとかけるなるへし
花鳥説略之　たゝめのとの詞也
ひこほしに恋はまさりぬあまの河へたつるせきを今はやめてよ

三条西実隆『細流抄』

あまの河をわたりても　此詞あまたところにありつきつきめのとの薫の事をいま思ひいてゝ母君もけにもとおもへる也。

中院通勝『岷江入楚』

あまの河をわたりても　かゝるひこほしの光をこそは

河　七夕に恋いはまさりぬ天河へたつるせきを今はやめてよ

花　あまの河をへたてゝもトアリ

あけ巻の巻には匂宮の事を彦星にたとへていへり。こゝには薫大将のことをひこほしの光といへり。上の詞には七夕ばかりにてもかやうにてみたてまつりかよはんは、いといみじかるべきと中将君の中君の事を申侍る。男をば彦星といひ女をばたなばたといへる也。

秘　此詞あまた所にあり。　さきさきめのとの薫の事をいひし事を今思ひ出て母君もけにもと思へる也。

箋　あまた所にあり。されども面白くかへてかけり。

北村季吟『湖月抄』

あまの川をわたりても

細　此詞あまた所にあり。さきざきめのとの薫の事をいひしことを、今思ひ出でて、母君もげにと思へる也。

孟　薫の躰にめでて、まれにあひ給ふともと北方の心也。上の詞に、七夕ばかりにてもと云ふ詞をあはせて、あまの川をわたりてもとかけるなるべし。

『孟津抄』の注釈内容は『花鳥余情』の説を踏襲している。『細流抄』は、「あまの河をわたりても」という表現について「此詞あまたところにあり」と記し、『源氏物語』本文の特徴へに言及しようとする意識が見受けられるものの、人物造型の特徴を浮かび上がらせる注釈内容という点では『花鳥余情』の方が成功している。『岷江入楚』は、『河海抄』と『花鳥余情』とを引用したうえで、「秘」として三条西実枝による注釈を、「箋」として三条西公条による注釈を加える。「秘」と「箋」の注釈内容を検討しても、『花鳥余情』ほど物語全体をふまえた注が施されているとは言い難い。『湖月抄』には、第二節で述べたように、『細流抄』と『孟津抄』を尊重する注釈態度があらわれている。

以上、東屋巻本文に対する注釈史を確認することによって、『花鳥余情』の注釈態度が浮かび上がってきた。「彦星の光」に対する注釈方法から明らかになった『花鳥余情』の『源氏物語』享受の特徴を次節にまとめる。

六、おわりに

『源氏物語』宇治十帖における「彦星の光」に対する注釈をてがかりとして、『花鳥余情』の特徴を検討した。第二節から第五節にかけて、『花鳥余情』が物語本文の全体を踏まえた注を施していることや、その結果として、物語享受者が人物造型の特徴も理解することができる仕組みになっていることを述べてきた。この注釈内容が『源氏物語』の深い読みとも連関することに触れておきたい。

『源氏物語』宇治十帖には、「彦星の光」や「七夕」、「天の川」という表現が散りばめられている。総角巻における「彦星」は、宇治大君からみた匂宮を指す表現であった。大君は、妹・中君を匂宮に縁づけたいと思っており、その隔てとなる宇治川を「天の川」に喩えてもいた。東屋巻において、「七夕」の牽牛・織女のように一年に一度の逢瀬でもよいから結ばせたいと記されたのも、匂宮である。東屋巻の前半は、浮舟の母君が、浮舟と匂宮との縁談を期待するものであった。一方、東屋巻後半で「彦星」に喩えられたのは薫である。浮舟の母君が、浮舟と薫との縁談を期待する場面で用いられていた。

『花鳥余情』は、それまでの注釈書が注を加えなかった総角巻から、引歌二首を挙げて、「彦星」と宇治の姫君の逢瀬の有難さに触れている。東屋巻本文への注釈では「総角の巻には匂宮の事を彦星にたとへていへり。こゝにはかほる大将の事をひこほしの光といへり」と明記し、総角巻から展開されてきた物語の読解へと享受者を導く仕掛けが施されている。『花鳥余情』以外の注釈書は「あまたあり」のような注に止まっており、「彦星」という表現の重なりや、それが誰を指すのかといった内容は曖昧なままにされている。

しかし、宇治十帖においては、作中人物の誰が、誰を「彦星」に喩えているかを明らかにすることが必要不可欠である。宇治十帖は、宇治大君―中君―浮舟とつながる「形代」の物語であるが、『花鳥余情』の「彦星の光」への注釈を重ねて物語本文を読むことによって、この「形代」物語の特徴が鮮明になってくる。すなわち、宇治大君の形代として浮舟が登場し

たということだけではなく、『花鳥余情』の注釈内容である「誰が、誰を、彦星に喩えたのか」を理解することによって、「形代」の物語という特徴がより強固なものとなる。総角巻で、自分の身内（ここでは妹・中君）を「彦星」に縁づかせたいと願うのは宇治大君であった。東屋巻で、自分の身内（ここでは娘・浮舟）を「彦星」に縁づかせたいと願うのは浮舟の母君であった。『花鳥余情』の「彦星の光」への注釈内容は、庇護者としての宇治大君と浮舟母君との重なりをも示唆するものである。浮舟物語が、大君・中君物語の全体を経て成立したものであるという読みを、注釈史上初めて提示したのが『花鳥余情』であったといえよう。

謝辞
本稿は、第二十三回天文文化研究会（二〇二二年六月十九日、於・大阪工業大学梅田キャンパス）における研究報告に加筆したものである。研究会にてご教示いただいた先生方に御礼申し上げる。なお、本研究は、科学研究費助成事業・挑戦的研究（萌芽）『天文文化学の創設：天文と文化遺産を結ぶ 文理融合研究の加速』（課題番号 19K21621、研究代表・真貝寿明）の助成を受けたものである。

注

（1）文明四年（一四七二）に成立した初稿（度）本と、その後大内政弘の求めによって送付した文明八年（一四七六）の再稿本との系統がある。さらに、文明十年（一四七八）に禁裏に奏上した献上本の系統も存する。

（2）伊井春樹氏『源氏物語古注釈集成　第一巻　松永本花鳥余情』桜楓社、一九七八年。同『源氏物語注釈史の研究　室町前期』桜楓社、一九八〇年。伊井春樹編『源氏物語注釈書享受史事典』東京堂出版、二〇〇一年等。

（3）稲賀敬二氏『源氏物語研究叢書4　源氏物語注釈史と享受史の世界』新典社、二〇〇二年等。

（4）武井和人氏『一条兼良の書誌的研究　増補版』おうふう、二〇〇〇年。

（5）松本大氏「『花鳥余情』における『河海抄』利用の実相」、『中古文学』第一〇四号、二〇一九年十一月。

（6）『花鳥余情』序文を以下に示す。なお、『花鳥余情』本文は、献上本系統である龍門文庫蔵本を引用する。龍門文庫本『花鳥余情』本文は、奈良女子大学学術情報センター・画像電子集・奈良地域関連資料・阪本龍門文庫画像集で公開されている写真版を、私に翻刻した。注（8）・注（20）も同じ。また、次の引用のうち『河海抄』に関連する本文に傍線部を付した。
http://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/y05/y052/html/s/n01/p006.html（閲覧日：二〇二二年九月三十日）

あつまをもろ〳〵のうつは物のうへにをき紫をよろつの色の中にたとふるかことしみなもとふかき水はくめともさらにつくる事なくくらくなき玉はみかけはいよ〳〵光をます我国の至宝は源氏の物語にすきたるはなかるへしこれによりて世々のもてあそひ物と成て花鳥のなさけをあらはし家々の注釈まち〳〵にして雪蛍の功をつむといへともなにかしのおとゝの河海抄はいにしへいまをかんかへてふかきあさきをわかてりもとも折中のむねにかなひて指南の道をえたりしかはあれと筆の海にすなとりてあみをもれたる魚をしり詞の林にまふしゝてくいせをまもる兎にあへりのこれるをひろひあやまりをあらたむるは先達のしわさにそむかされは後生のともからなんそしたかはさらんやつゐに愚眼のをよふ所を筆舌にのへて花鳥余情と名つくるところしかなり

（7）『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、一九九四～一九九六年）に依る。総角巻の底本は大島本である。ただし、『源氏物語大成』、『源氏物語別本集成』、『河内本源氏物語校異集成』を用いて校異を確認している。

（8）『花鳥余情』本文は、龍門文庫本『花鳥余情』に依る。奈良女子大学学術情報センター・画像電子集・奈良地域関連資料・阪本龍門文庫画像集。
http://www.nara-

wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/y05/y052/html/s/n13/p026.html　（閲覧日：二〇二二年九月三十日）

（9）世尊寺伊行『源氏釈』（一一七五年以前成立）、藤原定家『奥入』（一二三三年以降成立）、素寂『紫明抄』（一二五二～一二六七年頃成立）、四辻善成『河海抄』（一三六二～一三九四年頃成立）には立項されていない。

（10）『万葉集』本文は『新編日本古典文学全集　万葉集』（小学館、一九九四～一九九六年）に依る。

（11）『伊勢物語』本文は『新編日本古典文学全集　竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（小学館、一九九四年）に依る。

（12）『細流抄』本文は、伊井春樹編『源氏物語古注集成第七巻　内閣文庫本・細流抄』（桜楓社、一九八五年）に依る。

（13）『孟津抄』本文は、野村精一編『源氏物語古注集成第四～六巻　孟津抄』（桜楓社、一九八七年）に依る。

（14）『岷江入楚』本文は、『源氏物語古注集成第十一～十五巻　岷江入楚』（桜楓社、一九八〇～一九八四年）に依る。

（15）『湖月抄』本文は、『源氏物語湖月抄（上）～（下）増注』（講談社、一九八二年）に依る。

（16）稲賀敬二氏『源氏物語研究叢書4　源氏物語注釈史と享受史の世界』新典社、二〇〇二年等。

（17）『河海抄』本文は、玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）に依る。

（18）注（17）に同じ。

（19）和歌の引用は、新編『国歌大観』編集委員会『新編国歌大観 DVD-ROM』（角川学芸出版、二〇一二年）に依る。

（20）『花鳥余情』本文は、龍門文庫本『花鳥余情』に依る。奈良女子大学学術情報センター・画像電子集・奈良地域関連資料・阪本龍門文庫画像集。http://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/y05/y052/html/s/n14/p028.html　（閲覧日：二〇二二年九月三十日）

（21）『紫明抄』本文は、龍門文庫本『紫明抄』に依る。本文は、奈良女子大学学術情報センター・画像電子集・奈良地域関連資料・阪本龍門文庫画像集で公開されている写真版を、私に翻刻した。http://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/y05/html/069/s/p256.html（閲覧日：二〇二二年九月三十日）